

## 2023年アスク映像祭総評

令和5年 木邑芳幸

今年に入りコロナ禍も記憶の底に沈み日常が戻りつつある中、アスク映像祭もループ上映からプログラム上映となり、本来の姿が戻ってきた。応募数も昨年よりも増えている。概略アニメーション、実写系の応募があったが、実写は15点ほどある中で残念ながら今回入選にならなかった。実写は10分という短編との整合が悪いのであろうか？SNSではショートムービー化が進んでいるが、今後の展開に期待したい。

大賞は、まちだりなの「ニンジン」は待ってくれない」であった。

ブラックホールのような黒い点と、そこから成長するニンジン。時間と空間が歪み生と死を思わせるニンジンのオレンジ色と雪景色が良いコントラストを成していた。宇宙がビッグバンにより誕生した説をも連想させる作品であった。この作品は受賞に関して意見が分かれた。「分かりにくい」という点でネガティブな指摘があったが、私は言葉を越えた映像ならではのインパクトは映像の可能性を進めると高く評価した。

久里洋二賞は石塚瑛介の「ever ReDreamer」であった。ペンで創作していた少女が個性を探す旅に出るが、世の中のトレンドに次々に吞まれて身動きが取れなくなってしまう。再び創造性を取り戻すことで自由を獲得するというストーリーは現代の若者を取り巻く環境を寓話的に表わしている。創造性を如何に取り戻すかが現実の課題で有るが。

西村智弘賞は劉明承の「ストロー」であった。ストローを吸いながら何かを飲む男の姿を、人間の欲望と果てしない商品の生産、消費のサイクルとして表わす。男は世界を吸い尽くしてしまう。マルクスは資本を“運動”として定義した事を思い出させる。人新世の時代として環境は破壊され地球は欲望に吸い尽くされてしまうであろうか。

アスク賞はキム・ハケンの「WHITE PHONE CALL」であった。暗闇で電話を待つ男が障害を乗り越えて電話に出るまでの極めてシンプルなストーリーである。

モノトーンの画面が緊迫感を高めている。男は何の為に電話に出るのか？妨害する犬は何故居るのか？全ては自分の内面の世界なのか？シンプルな故に観客はそれぞれの個人のストーリーに重ねやすい。近年の不安な情勢を象徴する作風であった。

大澤慶彦の「私生の殻」は実験性の高い作品であった。卵の殻を割るところからストーリーが始まり、ファンタジーのような哲学ような不思議なイメージが連なる。昔のアングラを思い出させる作品であった、今後の展開が楽しみである。

増山透の「Parking Area」は夜の高速道路で微睡む女性がみるファンタジーである、完成度の高さクールな画面が魅力的であった。許願の「Sewing Love」は初めは男女の美しい愛のファンタジーだと思って見ていると後半関係性が恐ろしい執着、怨念に変わって行く。縫うという言葉を手早く人間関係のし絡みに展開した美しくも怖いファンタジーであった。

片山風花の「Door」は前回に続きちょっとトリッキーで可愛い作品であった。

菅野彩奈の「YUMEMUSHU」は図書館を舞台とし書籍のストーリーの虚と現実が混ざった不思議な世界を描いている。KUWAの「ゾウのかたち」は幼少期の性に関する題材をコミカルに描いている。

倉澤紘己の「えんそくだったひ」は遠足に行けない子供の心情を美しい雨のシーンで描いている。続いて新海大吾の「ぼくがこわい黒いもの」は幼少期に体験する漠然とした生命に対する畏怖を感じさせる作品であった。池田夏乃の「はなくそうるめいと」は汚くて可愛いはなくそのキャラがユニークであった。大人になって関係性が変わってしまったおちが良い。王俊捷の「よだか」は宮沢賢治の原作を基に創った作品。丁寧に創られて宮沢賢治の世界が表出する完成度が高い作品であった。武馬由季の「まとわりつきやがって」は通勤電車のストレスを生理的に訴えかけるセンスが凄い。脇屋花歩の「Caresse」は短いながら強く身体の感触が映像から伝わる作品であった。石帆の「Lullaby」は暴力的な親子関係を描いた作品。逃れる事が出来ないことがヘソの緒の繋がりでシンボリックに描かれている。はるおさきの「いずみのこえ」は家族間の暴力のトラウマを湖の静けさで癒されている過程を描いている。登場人物と同時に観ている観客にも癒しが訪れる。

朝倉小冬深の「STILL LIFE」日常の過ぎ去る情景をシルエットで描いている。サウンドの使い方が効果的であった。石川真衣の「肉にまつわる日常の話」は幼少期に観た映画の影響で肉が食べられなくなった日常をコミカルに描いている。肉が入っていないインスタント食品を発見した喜びも描かれているが、最近は大豆たんぱくが商品棚に並ぶ時代である意味良い時代になったのであろうか、大澤由佳は「ESORICISM」と「Traum Albelt」の2作品が入選した。どちらもCG作品で奇想天外なイメージの展開は新しい可能性を感じさせる各品であった。